

「エジプトの社会と文化ー多様性と持続性ー」

ヒシャム・バドル駐日エジプト大使

開会あいさつ（岩手大学学長 平山健一）

皆さん、こんばんわ。こんにちわかな。学長の平山です。本日は、エジプト・アラブ共和国（エジプトの正式名称）駐日特命全権大使ヒシャム・バドル閣下をお呼び致しました。大使は、エジプトを代表して日本に来了ますから、天皇陛下とも総理大臣とも同格の立場で、大変に思い責任を担っています。

さて、皆さん、エジプトはどこにあるかは知っていますね。そのエジプトのナイル川と岩手県を流れる北上川は姉妹河川です。ナイル川の長さは6,700キロ、北上川はたった250キロ。大変な違いです。姉妹河川のきっかけを作ったのは、一関で「ベリーノホテル一関」を経営している斉藤哲子さんです。岩手大学の経営協議会委員でもございます。斉藤さんは、代々のエジプト大使と親交を深めてきましたが、バドル大使の前任のカレム大使が5年前に岩手を訪問された折、私も一員に加えて頂き北上川や猊鼻溪を案内しました。大使は北上川の緑溢れる水辺に強い印象を持たれ、案内していた我々に「ナイル川でも北上川でも、人間の生活にとって水はなくてはならないもの、川があって文明ができる、その点は全く同じだね」と言われたのが、交流の契機となりました。平成15年3月、京都で行なわれた第3回世界水フォーラムにおいて、私が会長をしているNPO組織「北上川リバ



ー・カルチャー・アソシエーション」が北上川側を代表し、エジプト側は「ナイル川環境保全協会」が窓口になり、協定書に署名致しました。その翌年、姉妹河川締結一周年を記念して当時の早稲田大学教授の吉村作治さんに一関で講演してもらいました。吉村先生は「すごく違和感あるね、こんなに違った川同士が姉妹河川というのは。だけれども、ぜひ北上川でもナイル川に負けずに、川の恩恵、水のありがたさを伝承する活動をしてください」と励ましを頂きました。その後、会ではエジプトを訪問したり、両国の友好推進のための活動を継続しておりますが、エジプト大使には、毎年、北上川を訪問して頂いております。

このような交流を通じて、大使閣下が私を友人として認めていただいていることは大変光栄ですが、今回は盛岡まで足を伸ばしてい

ただき、岩手大学で講演の機会を作って頂きました。心からお礼を申し上げます。先ほど、玉先生がお話ししたように、エジプトは、アフリカ、アジア、ヨーロッパの結節点にあって、異なる宗教、文化、人種のせめぎ合いの中で、7,000年という人類の歴史上、最も長い間、国家を存続させてきたのです。多様なものがどの様に共存してこれたのか、今日のお話の中で触れていただけるのではないかと、私も大変楽しみにしています。

大使閣下は、本当は日本語も大変お上手なのですが、きょうは皆さんが英語のプラクティスができるように英語でお話いたしますので、英語の勉強もしながら、エジプトのことも勉強してください。それでは、バドル大使、よろしくお願いいたします。

講演：ヒシャム・バドル駐日エジプト大使

ナイル川と北上川の姉妹河川提携

皆様こんばんは。最初に、私にこのすばらしい機会を与えてくださいました平山健一学長様ほか大学関係の皆様にお礼を申し上げます。このような権威と歴史のある大学、日本



の立派な高等教育機関でお話をする機会に恵まれたことをとてもうれしく思いますし、特

に宮沢賢治も学んだ岩手大学でお話できることは、特別な思いがいたします。そして、この大学では、1949年の設立から半世紀以上にわたって立派な学生たちを輩出してきたと聞いております。

平山学長が先ほどおっしゃったように、私もはととても親しい友人になることができました。また、平山学長のリーダーシップもあって、世界一長い川であるナイル川と岩手県の北上川が姉妹河川の提携を結ぶことができました。エジプトではナイル川は、長い大きな川であると同時に、大きなハートを持った川であると、いつも私は話しています。ですから、このエジプトのナイル川と、そして北上川が姉妹河川の提携を結ぶことができたことは、とても栄誉なことだと思っております。

昨年、平山学長を代表とする日本からの訪問団がエジプトを訪れてくださいました。そこでエジプトの現地の人たちからとても温かい歓迎を受けました。このように、ナイル川と北上川の姉妹河川提携関係はとてもうまく機能して、文化的な、そしてまた民族を超えた対話ができたとと思います。日本とエジプト、ナイル川と北上川の縁をきっかけとした交流は、日本とエジプトに共通する文化があること、人に対する敬意を大事にする共通の特徴を持っていることを物語っていると思います。これは、文明間または民族間の対話におけるとてもよいモデルになると思います。

さらに現在、この権威ある岩手大学で4人のエジプト人留学生が学んでいることをとてもうれしく思います。この4人の留学生たちが農業や獣医学の分野ですばらしい学業を修めていることをとても誇りに思っております。

4つのテーマ

きょうは、皆さんに4つのお話ししたいと思っております。まずは、エジプトにおける教育政策。ことにエジプトが社会の中で教育を重視して取り組んできたことについてお話ししたいと思います。

2つ目は、もう少し広い意味で教育というものを考えたいと思います。これは、より高い人間性を求めて人を教育するとはどういうことか、皆さんとともに考えたいと思います。これは、マイクロレベルのことではなくて、より幅広い意味でのお話になると思います。

それから、3つ目にはイスラムについてお話をしたいと思います。皆さんもご存じのように、イスラムは1つの宗教ではありますが、最近この宗教に対する誤解が広がっているので、イスラムについて少しお話をしてみたいと思います。

この3つをお話ししました後、4つめに皆さんとできるだけ対話したいと思います。ですから、用意してきたものを少しカットして、最後に皆さんからのご質問やご意見などを伺いたいと思います。

エジプトの教育政策

エジプトは、ご存じのように長い歴史を持ちます。エジプトは、恐らく7,000年前から人間の文明としては初めて、人々の教育を行った文明であると思います。人々を教育し、学ぶスキルを育て、よりよい社会を築くことを目指してまいりました。実際に古代エジプト人たちが後世の人間に残したすばらしいものは、現在でも目にすることができます。このように今でも目で見たり、認識したりできるのは、人々を教育し、学び、そして社会をよくしていこうとする取り組みの賜だと思っ

ております。今日、教育の問題は、エジプトの国を発展させるための戦略の中でも中心的な位置を占めております。政府は、特に1952年の革命以来の歴代の政権は、教育の社会的な地位を国内で上げようと努力してきました。教育の機会を有効に活用し、それによってエジプトが直面する課題に取り組んできました。私どもエジプト政府の教育省が述べている使命宣言に、そのビジョンとエジプトの教育に対する考え方があらわれています。

すなわち、エジプト政府は、中央集権ではなく地方分散の形ですべての国民に質の高い高等教育を提供する義務があると述べられています。これは、すべての国民の社会参加に立脚しています。エジプトでは、すべての地域ですばらしいモデルを提示しています。このモデルは、一般国民を情報化時代に対応できるように教育すること、また相互契約という考え方に基づいて、また民主主義や進歩という原則に基づいて教育を行っていくというものです。これが、エジプトの進める教育政策であり、その目的です。

教育政策の成果と日本の大学への期待

エジプトは、これまで発展途上国が抱える大きな課題に取り組んできました。その成果として、教育の分野ではさまざまなことがなし遂げられました。例えば1980年／81年度に、エジプト全国にはおよそ1万8,600の学校がありました。それが今日では4万校にまで増えています。これはおよそ四半世紀で210%になったことになります。また、教育政策の自由化にも取り組んでまいりました。これにより、私立の学校や教育機関をふやし、人々のさまざまなニーズに合うようにしてきました。1980年／81年度では、およそ私立の学校

が1,000校ありました。それが現在では5,000校になっています。そこで学ぶ生徒の数が130万人にもなっています。エジプトの学校に在籍する生徒の数も現在1,600万人になっています。さらに、教育での男女平等も推し進めてきました。その結果、現在エジプトの学校で学んでいる児童生徒のうち48.1%が女子です。

エジプトでは、中東及びアフリカ中部で最も古く、そして進んだ教育制度を持っています。今日エジプトには国立大学が17校、そしてほかに私立及び外国の大学なども数多く誘致しております。その中には例えばアメリカの大学やフランスの大学、ロシア、イギリス、カナダ、そしてルーマニアの大学などもあります。願わくは今後日本の大学がエジプトに来てくれるならばうれしいことだと思っております。エジプトに日本の大学が来ることによって科学技術の分野でのすぐれた研究の中心となり、またエジプトの学生たちにすばらしい教育の機会を与えてくれることを望んでいます。

日本の大学がエジプトでよいモデルになると考える理由は、日本の大学は特に研究レベルがとても高いからです。ですので、日本の大学が来てくれることによって、エジプトの産業振興にも大いに役立つだろうと考えています。エジプトでは、特に中間管理層、また情報通信やコンピューターの技術を持った研究者や技術者を大いに必要としています。日本の大学が来ることによって科学技術やコンピューター、通信といった分野のすぐれた卒業生を輩出して、その人達が労働市場に入って、エジプトの産業の発展にも寄与してくれるものと思います。これこそが持続可能な教育の姿だと考えております。

高等教育向上プロジェクト

エジプトで最もよく知られている大学というのは、恐らくカイロ大学だと思います。およそ100年前にできた大学ですが、現在学生数が16万人おりまして、さまざまな分野での質の高い教育をしております。およそ26の学部、学科に分かれています。

エジプト社会が持っているさまざまなニーズにこたえるため、また人口もふえておりますので、そういった人々が持つさまざまなニーズにこたえるために、エジプト政府は戦略的な教育改革政策を2000年に立ち上げました。これは、高等教育向上プロジェクトというもので、現在具体的な取り組みが行われています。これは、エジプトにおける高等教育の質を高めることが大きな目的となっています。この中で、六つのプロジェクトが現在進行中です。一つ目が学部リーダーシップ開発プロジェクトというもの、二つ目が高等教育向上プロジェクト、高等教育において今何が起きているのか、何が問題であるかということの研究し取り組んでいくプロジェクトです。そして、高等教育機関向上プロジェクト及び情報通信技術プロジェクト、五つ目が保証及び認証プロジェクト、六つ目が学部教育向上プロジェクトとなっております。

1987年に、エジプト政府は大学のネットワークを構築するプロジェクトを始めております。その目的は、エジプトの大学、お互いに大学同士、及び国外の大学とのつながり、交流を促進しようというものです。エジプトの大学は、これまでもずっとほかの大学との提携の合意をどんどん広げてまいりました。現在、日本の48大学とエジプトの大学がこういった提携の合意をつくっています。北海道から沖縄までさまざまな大学との提携が成立し

ており、学生や教授、また学部同士の交流なども活発に行われております。このような提携を通じまして、現在およそ400人のエジプト人の学生が日本の大学で学んでおります。岩手大学にいる4人の大学院生もその一部ということになります。エジプトの大学は、今後も日本のさまざまな大学との提携を進めたいと考えておりますので、今後岩手大学ともこのような提携を結び、さらにお互いの利益のために向上していけるよう協力できることを望んでいます。

日本とエジプトの大学が今後も交流を続け、提携をふやして、現在400人いるエジプト人の学生がさらに500人、600人となっていくことを期待しています。こうすることでエジプトと日本、そして大学というこの三つがお互いに教育を高めていくための中心的な役割を果たしていくものと考えています。

日本との連携の具体例

具体的な例もお話ししてみたいと思います。と申しますのも、一般的な話だけではわかりにくいと感じるためです。一つの例として、熊本の大学と進めてまいりました提携、交流、協力の様子についてお話ししたいと思います。がんの治療に関する協力なのです。熊本大学ではガン治療について、これまでは化学療法が多く用いられてまいりましたが、この化学療法は体のガン以外の部分も壊してしまう弊害があります。ですので、化学療法を用いないでガン治療をする方法について熊本大学では先進的な研究をしています。エジプトの大学の教授が熊本大学のこの分野で権威である前田先生のところに伺いまして、この研究成果をエジプトへ持ち帰り、エジプトで特に多い肝臓ガンの治療に生かして



まいりました。この結果、これまでもう治らないというふうに使われてきた肝臓ガンの例が多く治療されてきました。これまでで熊本大学との協力によって50例で治療が行われ、成功しております。

もう一つの例を申し上げます。皆さんご存じかどうか分かりませんが、カンボジアで皆さんご存じのように、エジプトでも地雷が実に多く残されています。およそ2,300万個の地雷が第2次世界大戦の名残でまだ残されています。これは、ドイツとイギリスがエジプトの領土で戦った結果残されたものです。この地図にありますように、北が地中海、左がリビアですね、そして右側、紅海があります。ナイル川の西側に砂漠がありますが、ここにおよそ2,000万個の地雷がまだ残った状態になっています。この地雷があるためにこの土地を使うことができません。これまで行われてきた方法は大きな車を使って、高い装置を使って地雷の場所を確認する作業で行われてきましたが、これはとても高くつくものです。ですから、日本の大学との提携によりまして、もっと安価に、そして簡単に安全にできる方法を研究してまいりました。この結果、風船の下に特別な装置をつけて地雷がどこにあるのか探知する、そういう技術を開

発しました。これは、エジプトにとってとても役に立つ技術で、これによって砂漠地帯から地雷を除去することができれば大きな土地が使えるようになり、そしてビッグプロジェクトにも使えるようになりますので、とてもよい技術提携の例です。

「文明の衝突」という考え

ここでちょっとトピックを変えまして、教育というものをより広い観点から見てみたいと思います。広い意味で教育を考えると、教育は相異なる社会や国家、文明、あるいは宗教に影響しています。現在、教育はきわめて重要です。バランスがとれた、寛容で、そして自己批判に対してオープンな、そういった人材の育成のために教育が今とても求められていると思います。これが、歴史的にも続いてきた、そして現在も残念ながら続いている分断、人々の間の分裂や分断を効果的に解決していく鍵となると思います。現在まだ国際社会の中で分裂、分断が大きくなってきていますし、さまざまな文明や文化の間でも分裂が起こっています。ですから、教育の重要性を広めることは焦眉の急となっておりますし、また今後私たちが直面する課題に当たっても教育がとても重要な役割を果たします。

今日、例えば世界の通信技術、通信網が人間同士の会話、世界各地の対話をフェンスを乗り越えて、さらに大きく広げています。ですから、あしたメッセージを世界に向けて発信しようと思ったときにどうすればいいかは、もう私たちはわかっている環境にあります。もし私たちの嫉妬や憎しみといった感情が寛容や理解を超えて大きくなっていった場合、私たちは明日どんな困難に直面するかわかると思います。つまり、さまざま

な分野で人間同士の、また宗教や民族の違いに基づいた対立を引き起こそうと考えている人たちにとって、とても都合のいい環境になっています。

ここ数年の間にさまざまな課題に私たちは直面してまいりました。この中でも最も厄介な問題は、文明の衝突は避けられないという考えが宣伝をされ、広まってきていることではないかと思います。残念ながらこの文明の衝突は避けられないという考えは非常に広まってしまい、高い地位の多くの人たちが受け入れるようになってしまいました。さまざまな文化や国を超えて、またさまざまな理由から受け入れられるようになってしまっています。

これらの人々の間では、それぞれ自分が持っている理由から、そのような破壊的な理論をもっと高めたいと考えている人々がいるのも確かです。しかし一方で、このような文明の衝突は避けられないという考えは、これは本当ではないと、真実ではないと考え、立ち上がり、言葉で、あるいは行動で証明してきた人もいます。そして、この考えは簡単に避けることも、論破できるものであることも、このような人々は証明してきました。

この文化や民族の違いを乗り越え、分断を防ぐために有効な方法があるという原則を私たちは築いていかなければなりません。分断がやがて紛争に発展する前に、この根本的な原則の確立に取り組んでいかなければならないのです。これらの問題を解決することによって、平和で正義が確立された、そして和解による世界をつくっていくことができると思います。

対話によって世界を作る

初めに私たちは、本当に知識がない、けれども教育を受けたいと心から願っている人々と、それから狭い政治的な動機や何らかの策略に動機づけられて行動している人、この2者を分けて考えなければならないと思います。もちろん前者の教育を受けたいと、今現在知識がなく教育を受けたいと考えている人たちに対しては手を差し伸べ、教育を提供していかなければなりません。しかし、後者の人々は孤立させ、端っこに追いやらなければならないと思います。

また、対話を進めていくためのもう一つ重要な前提条件としては、複合性や、また多様性を大切にすることです。文化の多様性というものは、祝うべきものであって、重荷になるものではありません。文化の多様性は、みんなで祝うものであり、あざけるものではありません。私たちが文明というものを語るとき、それは連携、連盟というものを語るものであって、ばらばらになることを語るものではありません。真に寛容な教育は、自分自身の文化や伝統を大切にするとともに、ほかの人の伝統も尊重するというものであり、これはさまざまところに中心を置いて行われるべきで、民族中心に固まるものではありません。

そして、3つ目の重要な原則としましては、私たちは対話の促進を世界に広げていくことです。これは平等や相互理解、相互に尊重し合うことがベースとならなければなりません。より多くの幅広い知識、そして知恵を集集しなければなりません。私たちの最大の敵は、傲慢さと自信過剰にあります。自分たちがほかの人たちよりも全体的にすぐれていると考えている人たちは、自分から見て劣って

いると思っている人たちとの対話を拒否する姿勢をとります。そこで対話が起これたととしても、いずれは失敗するでしょう。

教育の役割

実際すべての人間の安全が脅かされている状態の中であって、教育はそれを防止する役割を果たします。まず第1に大切なこととして、教育によって非暴力、寛大、民主主義、連帯、正義といったものを広めることです。これは平和的に人類が競争していくために極めて重要なことでありますし、人間が若い時から学んでいくべきものです。そして、受け継いでいかなければなりません。人々が気づき始めていることは、戦争というものは人間の心の中で始まるということです。ほかの人をどんなふうに見るかということに根差しています。簡単に言うと、自分たちがその人たちがどんな人かをわかる場合は人を殺さないということです。だれかを殺すことを正当化する場合、何か自分たちとの間に超えられない大きな違いがあると考えるときに人を殺すことが正当化されます。この違いが自分に脅威を与える違いであると考えられる場合です。人間に共通するものをこれらの脅威が圧倒すると感じてしまうわけです。この意味で、紛争というものは、よいものと悪いものの間の争いです。よいものというのは、私たちを分断するものよりも結びつけるものの方がもっと大事だということです。これに対して、邪悪なものの方はこれとは反対な見方をします。私たちを分裂させる、分け隔てる方が結びつけるよりももっと大事だと考えているわけです。

教育は、よく言われますが、橋をかけることだと思います。また一方で、教育は窓をあ

けることでもあると思います。窓をあけ、そして鏡をつくることです。自分自身を鏡に映し出して考えてみる、見直して見る、自分自身を批判して見るということは、寛容性やより広く開かれた社会を築く上でとても重要な指標になります。また、私たちの狭い視野を飛び越えて、この窓から、私たちの文明の窓からそこを飛び越えた広い範囲を見るということがもっと重要になってきます。これらは難しい作業ではありますが、とても重要な作業であります。

これは、どのような考え方かと申しますと、例えば皆さんのおうちには鏡があると思います。毎日のように自分を映し出して見ていると思います。鏡を見ると何を見るでしょうか。恐らくご自分の顔を見ることだと思います。それはよいことだと思います。けれども、自分の姿を鏡に映し、それだけを見ていると自分だけにとらわれてしまいがちです。ですから、窓から外を見えるということも必要です。そうすることによって自分とは違うもの、より広い分野のものを見ることができます。

イスラムについて

最後に、時間がなくなってきましたので、10分ほどイスラムについてお話ししたいと思います。現在は、イスラムは宗教としての側面が大きく取り上げられて、大きく議論されていますけれども、それについての考え方も時には意図的に誤解を招くような解釈がされています。

初めに、多くの人たちが教育と知識がイスラムに果たした役割がどれだけ大きいかご存じない場合が多いと思います。イスラムが生まれた最初のころに、知識と教育がとても重要な役割を果たしました。コーランの最初の



節の中に、預言者ムハンマドがこのことを語っている一節があります。その内容は、「読みなさい、神の名において。神はつくり上げたものです。神は人間をつくり出しました。そして、あなたの神は最も名誉の高いものです。読みなさい」。この神は私たちに書くこと、ペンを用いて書くことを教えてくれましたし、また私たちが知らないことを教えてくれました。このようにコーランの中においても祈ることやその他の宗教的な行動をすることよりも、まずは読むことを強調しているのです。ですから、イスラムにおいて知識を得ることと教育がいかに重視されているかわかりいただけるかと思います。

コーランの中では、驚くべきことに「知識」という言葉はコーランの中で3番目に最も多く使われている言葉です。3番目と申しますのは、神アラーという言葉、そして「維持する者」をあらわす言葉、この2つに次いで知識が3番目に最も多く使われているのです。

コーランの中でまたとてもよく使われている代表的な言葉にコンパッションとマーシー、「同情」と「慈悲」という言葉があります。また、神に感謝することもよく使われています。これは、神に感謝する行為が自分の満足をあらわす言葉でもあります。私たちが

日ごろ一番よく使う「こんにちは」は、イスラムの世界であなたに平和をとという意味を表す言葉が使われています。これが1日に10回ほど使われることになります。この宗教で特に強調されていることは、1人の人間を殺すことは、つまり人間、人類全体を殺すことだということです。

テロの原因

では、このようなお話をすると皆さんの中には、一体、世界で今起きているテロはどういうことなのだ。イスラム教がそれほど平和を大切にするよい宗教であるのに、なぜテロが起きるのかと聞きたいという方もいらっしゃることでしょう。それに対する答えは、現在起きているテロというのは宗教とは関係ないということです。これは、多分に政治と関わるものです。フラストレーションであったり、また希望を持ってないことなど、そういった感情から、また政治的な思惑から起こされるものです。テロを起こす根本的なものの70%がアラブ世界とイスラエルとの対立にあります。パレスチナの人々に国がないことです。イスラエルがどのようにパレスチナの人々を扱っているのか、これが70%を占める大きな原因となっています。人々はこの中で不満を抱え、家族を失い、また家をなくし、そして侮辱される、そういった日々を過ごしています。それらがやがて不満が高じて過激な行動となり、テロとなるのです。

このような否定的な暗い側面がありますけれども、皆さんがメディアの中で見ている孤立主義や、また反社会的な行動を起こしている者とは反対のことを、イスラム世界の人々の99%の知識人や政治家、また個人などは強く信じています。それは、すべての人間の運

命が一つであるということ、生活の中に多様性が現に存在し、また公正で機能できる効果的なメカニズムとして民主主義があること、そして民主主義がイスラムのもっと機能的なアプローチであること、さらに人間の権利、人権に対する強いかわりを持つこと、また他者をパートナーとして、あるいは友人として受け入れること、それらが新しい世界秩序を築いていく上で大きな役割を果たしていること、こういったことです。99%の人がこういったことを強く信じているのです。

尊重の価値観

人間同士相互に尊重し合う、敬意を払い合うことは、何も現在のイスラム世界のリベラリズムによって生み出されたものではなく、これはコーランの中にあるものです。具体的に書かれておりまして、次の二つの節を引用したいと思います。あなたたちすべての上に違った法や違った生活の仕方があります。でも、それがもし神の意思であれば、その神はこの違った法や生活様式がある人たちを一つのコミュニティにまとめることでしょう。もしそうでなければ、それは神が与えた試練であり、私たちはそれを受けなければなりません。そして、よい行いをすることによってこの試練に立ち向かってください。人間たちよ、私たちは一人の男性、一人の女性によって人間を生み出しました。そして、その人間が国家になったり、人種になったり、お互いに知り合うようになりました。これは、さまざまな人間がお互いに知り合うということが大切だということをあらわしている神の意思による呼びかけであります。これは、単なる寛大やお互いの理解といったものを超えるものであり、すべてが家族になるということで

す。このような考え方がこれまで述べてきましたイスラムの教えの中にある多様性の尊重や行動にかかわることだと思います。

ここまでで私のお話を終わりにしたいと思います。と申しますのも、平山学長さんがこのようなせっかくいい機会を設けてくださいましたので、皆さんからの質問を受け、対話をしたいと思います。ありがとうございました。

質疑応答（司会：玉真之介）

大使は、ぜひ学生の皆さんとディスカッションがしたいというご希望をお持ちでした。余り緊張しないで、本当に思いついたことでも、エジプトについて何でも構いません。聞きたいことがあれば、遠慮なく手を挙げて質問していただだけませんか。

○大使 遠慮なく、本当の聞きたいこと聞いてください。何でも、宗教、テロリズム、政治、文化、まことの。そうしないと、私ここにいる意味がない。

○質問者 私は、ウィリアム・クリアリーと申しますが、ここの大学の教員です。ただいまのお話、最初から最後までとても興味深く拝聴いたしました。ありがとうございました。

1つ知りたいことがあるのですが、大使はエジプトが発展途上国であるというふうにおっしゃったと思います。デベロッピング・カントリーであるとおっしゃったと思いますが、私の知っている範囲の印象では、エジプトはもう先進国ではないかと感じています。大使が発展途上国であるとおっしゃった背景には、一体このエジプトが発展の過程でどこにどんな位置にあるとお考えなのでしょう。

○大使 エジプトをそのようにとらえていただけてうれしく思います。エジプトの経済は、まだ2年前から始めている改革が進行中でして、その意味でまだ発展途上であるかと思います。経済成長率は現在6%で、来年には7%になると予測されます。海外からの直接投資が2年前で4億5,000万ドルでした。これが現在は12倍になりまして60億ドルになっています。マクロの意味で見ますと、例えばインフラといった面ではよく整備されてきてはいます。ただし、数字で見ますと1人当たりの収入は1,500ドルで、ほかの先進工業国と比べますとまだまだ低い水準にありますし、エジプト国民の中には貧困ラインぎりぎりの生活をしている人たちがまだまだたくさんいます。また、都会と地方の差もあります。都会、例えばカイロですとかアレクサンドリアなどに行きますととても近代的なビルが建ち、人々も近代的な生活をしていますが、しかし田舎の方に行くとまだまだ発展途上であるものをたくさん見て取れます。



例えば教育などもそうです。発展はまだ続いています。政府は、今さまざまな改革を行っております。世界の人々に誇ることでできる歴史と文化を持つ国でありますけれども、政治や経済という分野ではまだまだ発展、改革

の途上にあります。

また、発展途上国ではありますけれども、ほかのアフリカ諸国には支援を行っています。また、アフリカ諸国だけではなく、アジアでも例えばモンゴルといった国にはエジプトは支援を行っています。しかしその一方で、エジプト自身が例えば日本のODAのような形で支援を受けている状況にあります。

それから、もう一つ重要な点をお話ししたいと思います。かつて小泉前首相と食事をしながらお話ししたことがありますけれども、首相に対して私は申しました。日本はとても豊かな国です。でも、エジプトにこういうことわざがあります。健康というものは王冠です。その王冠は目に見えないもので、病気の人にしかない見えない王冠です、ということわざがあります。日本は経済が発展してお金がある。銀行にはたくさんのお金がある。けれども、人々は将来に対して不安を覚えています。あすはどうなるのだろうという不安が拭い切れずにいます。エジプトの人々はこれに対して、それほど日本人ほどお金を持っているわけではありませんが、日々に満足しています。ケ・セラ・セラ、どうにかなるさという考え方をもち、余りストレスを感じていません。発展途上国であるかは、このような考え方の違いにあるのではないのでしょうか。現在持っているもので満足するかどうかということ。日本の昔の文化には、このようにあるもので満足するという考え方があったのではないかと思います。そしていつかきっと今よりもずっとよくなるという、そういったことを信じながら人々は生きてきたのだと思います。ですから、発展している、していないという考え方は心理的な要素もとても多いのではないかと思います。

○質問者 教育学部の学生ですので、バドル大使が教育のことについてかなりたくさんお話していただけたので、とてもためになってうれしく思っています。

異文化理解ということについてお伺いしたいのですが、現在岩手大学の教育学部の学生と岩手大学を訪れている留学生と一緒に、小学校や中学校で異文化を紹介するような授業をやっています。中国の留学生やヨーロッパの学生、アメリカの学生もいるのですが、なかなかアフリカの方の学生さんと一緒にやる機会が余りなかったかなと思います。それで、小学校、中学校に例えばバドル大使がゲストとして招かれたとして、エジプトのことを紹介するとしたら、どんなポイントを紹介していただけるかなと思って、お聞きしたいと思います。お願いします。



○大使 まず、今おっしゃったような活動をされていることはとてもいいことだと思います。ここにいるエジプト人留学生をぜひ活用して、彼らは大使でありますから、ぜひ活用して一緒に活動してくればいいなと思います。

私は、学校を訪れることが大好きです。日本の役所を訪れるよりも学校を訪れることの方がずっと好きです。といいますのは、学校

を見ると、学校はこれからの私たちの未来を象徴しているからです。

エジプトの話をするときに、わかりやすいのは、エジプトというのは皆さんピラミッドですとか、スフィンクスとか知っていることがあるので、初めはとてもわかりやすいです。よく親しみを持ってくれます。その後で私は7,000年の歴史をお話しします。ここにありますがけれども、フォラオ時代のエジプト、ギリシャ、ローマ、アラブのイスラム、そしてアフリカの国であるということ、中東のエジプト、またアジアの中のエジプトということもお話しします。

どうしてエジプトがアジアかというと、シナイ半島があります。シナイ半島はエジプトの面積の10%ですがけれども、ここはアジアに含まれています。ですから、エジプトはアジアなわけです。そして、エジプトはアジアの一番西、日本が一番東というようなお話をします。

このような歴史があることから、エジプトは外国とのかかわりをとても自然に経験してきました。ギリシャも経験しましたし、クレオパトラですとか、そういったことも経験してきました。このような歴史から、エジプトは文化の回廊と呼ばれてきました。交流をずっと続けてきたわけです。エジプトが持つ特別なアイデンティティー、特徴としましてはオープンであるということだと思います。

また、次にお話しするのは、エジプトの95%が砂漠だということ。ナイル川はもちろん大事です。とても大事な川で、エジプト人はナイル川がなければ生きられません。有名な哲学者ヘロドトスの言葉で、「エジプトはナイルのたまもの」という言葉を皆さんご存じだと思いますけれども、エジプトの文化は川

の文化であるという点で日本と同じです。エジプトの人の94%はナイル川の流域に住んでいます。砂漠に人は住んでいません。ですから、川の文化、水の社会であるというのがエジプトの特徴です。ナイル川の水からパピルスで紙をつくり、また船をつくり、すべてのものがナイルからのおかげで発達してまいりました。

砂漠は、歴史上、エジプトを保護してくれました。日本がちょうど島国で、海によって守られてきたのと同じだと思います。砂漠があることで敵が侵入しづらくなります。それによって守られてまいりました。

また、エジプト人はとても宗教的な人たちです。宗教的ということはとてもいいことなのです。昨今日本ではメディアの影響もありまして、日本人の中で宗教というものが何かネガティブなものにとらえられている側面があるかと思いますが、エジプト人では宗教的であることはよいこと、ポジティブな意味を持って受けとめられています。

イスラムの目的は、つまりイスラムの神の目的は、人間の行いをよくすることにあります。そのために日々人々は祈り、コーランを読み、そしてよりよい人間になるために宗教的な活動をしているわけです。宗教において最も重要なことは、よりよい人になるということ、これが一番大事な目的です。より正直で、また正義を持った、人々によりよい行いをする、そういったことが宗教における重要な目的です。

そして、もう一つ最後に申し上げたいこと、エジプト人も日本人も自然から始まったということです。日本にも天照大神という神話がありますけれども、エジプトにも同じように太陽神をあがめます。エジプト人は、太陽を

毎日見ます。日の出を見て、また日が沈むのを見ます。それで、ああ、やはり太陽というのは人間と同じだというふうに古代のエジプト人は考えました。人も生まれ、そしていつかは死ぬ。そしてまた、いつの日か生まれ変わるという、死の後にまた生が訪れるという考え方をエジプト人も持っていました。

また、エジプト人は星からも学びました。カレンダー、現在の1年365日のカレンダーはエジプト人の発明です。ナイルの洪水がいつ来るのかということを知る必要があります、その必要性から生まれたのがカレンダー、星から得たカレンダーです。星を見て次のナイル川の洪水がいつ来るか知って、それに備えなければならない、その必要性が生じました。星を見ていたところ、星のシリウスがあらわれたときに洪水が来るということがわかりました。ですから、星の流れを見て、次にこのシリウスが来るのが365日後であるということがわかりました。これによって365日が1年というサイクルになりました。

このように日本とエジプトは、自然から多くのことを学び、これまで発展してきたのです。

司会 他にありますか、どうですか。

○大使 女性からだれも聞かれていません。何でも、難しい質問でも何でも、エブリシング、エジプトの首都はどこですか。手挙げてください。エジプトの首都わかる人は手挙げて。だれも知らない。みんな恥ずかしいかな。

閉会（岩手大学副学長 玉真之介）

残念ですが予定した時間を超えてしまいましたので、きょうのセミナーを終了させていただきたいと思います。E S Dという言葉を初



めて聞いた人もいるかと思いますが、きょうバドル大使が話してくださった内容がまさにE S Dの中心に位置している「尊重の価値観」というお話しでした。

それでは、バドル大使にもう一度大きな拍手を送っていただきたいと思います。

○大使 最後にちょっと。これから私は平山先生と学生にとってよいプログラムを考えます。観光と教育のプログラムです。多少夏は暑くても大丈夫。観光だけではなくて、エジプトの歴史と文化を学ぶプログラムつくりたいと思いますので、ぜひ学生のみなさんエジプトに来てください。